研究ノート

# 「マレーシアマイセカンドホームプログラム」における日本人参加者の異文化接触に関する現状と課題

**稗田奈津江**
マレーシア国民大学社会人文学部　日本語教員

**シティ・ハミン・スタパ**
マレーシア国民大学社会人文学部　准教授

**ノルマリス・アムザ**
マレーシア国民大学社会人文学部　日本語教員

**ムサエブ・ターライベク**
マラヤ大学言語学部　講師

本稿の目的は、マレーシアマイセカンドホームプログラム（通称MM２H）における日本人参加者の異文化接触に関する現状と課題を明確にすることである。本研究を遂行するに際して、量的及び質的研究の双方の手法を用いた。本稿で扱うデータは、日本人参加者100名から得られたアンケート調査の結果、また、座談会への参加者５名による具体的な意見や体験談、そして、この論考を進めるにあたり重要と思われる２名への個別インタビューから得られた回答である。調査の結果、日本人参加者は長期間にわたり海外に滞在しているにも関わらず、モノカルチュラリズムを維持している状態にあることがわかった。日本人参加者のほとんどは、日本にいる親類や友人との連絡を頻繁にとり続けており、マレーシアに滞在中のほかの日本人参加者との交流をとても大切にしている。一方で、日本人参加者と現地の人との接触は非常に限定的である。日本人参加者の間では、日系のスーパーで買い物したり、日本語が通じる病院へ行くのが当たり前となっている。日本人参加者が滞在先としてマレーシアを選んだ主な理由は、安い物価と穏やかな気候であり、彼らの現地社会の文化に対する興味や関心は非常に低い。また、日本人参加者の前には、情報の壁、スキルの壁、心理的な壁、文化的な壁が高く立ちはだかっており、それらにより、現地の人との異文化間交流を阻まれている。結果として、日本人参加者はさほど深刻なカルチャーショックや文化衝突、あるいは文化摩擦に陥いることなく、小さな日本人社会での交流を謳歌している状況にある。多くの日本人参加者が現状に満足しているという結果が得られてはいるものの、今後現地社会との異文化接触を促進していくことで、プログラムの実施者側と参加者側の双方にとって、更なる恩恵が享受できるものと思われる。

キーワード：異文化接触、国際退職移住、「マレーシアマイセカンドホーム」、日本人参加者

## １．はじめに

現代のグローバル化を象徴するのが国境を越える人の移動である。日本でも、外国人登録者数及び海外在留邦人数は右肩上がりに年々増え続けている。具体的には、2010年度時点において、

外国籍を持つ住民の数は200万人を超え、逆に海外で生活する日本人も100万人を突破している（片桐他編2010）。

しかし、日本人の滞在先をマレーシアに限って見てみると、むしろ減少傾向にある。マレーシアにおける在留邦人数は徐々に減少し、2008年には１万人を割っている。このように変化している理由を、在マレーシア日本国大使館では、1997年のアジア経済危機の影響により、マレーシア在留邦人数の増加傾向が鈍化し、2001年より日系企業（主に製造業）が生産拠点を周辺諸国へ移したためであると説明している。しかし、企業駐在員の数は減少している一方、マレーシア政府が長期滞在者を呼び込むために設けたマレーシアマイセカンドホームプログラム（以下、ＭＭ２Ｈと称す）に参加する邦人数はここ数年増加しているという。

ＭＭ２Ｈ参加者（以下、セカンドホーマーと称す）の生活拠点は日本国内ではなく、海外にあるわけだから、言語面や文化面において、さまざまな問題に直面することが予測される。しかし、日本人セカンドホーマーに焦点を当てた研究はまだ数が限られており、彼らの実状が十分に明らかにされてはいない。また、今後の課題についても十分な議論が尽くされているとは言えない。

マレーシア国民大学によって行われた、ＭＭ２Ｈに関する一連の研究は、マレーシア政府が受入側としてよりよい政策を打ち出すための提案をすることを第一の目的に実施された。しかし同時に、得られた情報を参加者側である日本に還元することも重要な役割の一つであると考える。本稿では、ＭＭ２Ｈにおいて日本人セカンドホーマーが直面している異文化接触に関する現状と課題を明らかにし、ＭＭ２Ｈプログラムと日本人セカンドホーマーの今後の在り方を検討する。なお、セカンドホーマーの実状をまとめるにあたっては、「入国前」、「滞在中」、「帰国後」の３つの段階に分けて分析することができるが、本稿は、２段階目の「滞在中」に的を絞って分析を行っている。

## ２．国際退職移住と日本人

ＭＭ２Ｈ参加者に特徴的なのは、定年退職者が圧倒的多数を占めているという点である。このように、定年退職後に祖国を離れ、海外に移住するという現象は、何も今に始まったことではない。

北ヨーロッパ地域では1970年代から既に、イギリス人やドイツ人などが退職後に地中海沿岸地域に移住する動きが見られたという（King 他2000）。ヨーロッパ地域では近年においてもそのような傾向は依然として続いており、例えば、イギリスのコンサルティング会社「エーオン」が2010年８月に発表した調査結果によると、多くのヨーロッパ人が定年退職後、スペインなどの気候が温暖な国で暮らすことを希望しているという。具体的には、海外への移住を希望する人は、イギリス人が58％、ドイツ人が54％、スイス人が47％となっており、いずれも半数近くにのぼっている。

ヨーロッパの事象に比べると、日本人高齢者の海外移住は比較的歴史が浅い。日本では19世期末から1970年代にかけて、経済的理由から南北アメリカやハワイへ移住する傾向が見られたが、現代の中流階級の世界規模での移住は、経済的理由以外の要素が移住の決定に大きな影響を与えている（Ip 他1998）。

経済的困窮から職を求めて移住する労働移民に対し、海外への憧れや生きがいを求めての移住者を、Sato（2001）は「ライフスタイル移住者」と名づけたが、日本人高齢者の海外移住も、こ

のライフスタイル移住に相当する。

鈴木（1997）は滞在期間と動機による移住の型を図１のように分類している。なお、「退職移住」の項目は、上述の鈴木（1997）には記されておらず、筆者が追加した。

図１では、縦軸に移住の動機、横軸に滞在期間を設定している。国際退職移住に着目すると、動機に関しては、旅行者と同様、自由意志による場合がほとんどであろうし、滞在期間に関しては、数か月から数年、数十年へと、比較的長期のものが多い。

Kubo・Ishikawa（2004）は、日本人高齢者を対象とした海外移住について、次のようにその特徴を述べている。彼らによると、気候と物価、新しい生活への満足度が滞在先を選択する要因になっている。日本社会が経済不安を抱え、近所親戚付き合いに縛られ、生きがいを見失っている状態が、海外移住に活路を見出しているとしている。しかし、日本人の海外滞在期間は、他国の人に比べて、短い傾向にあるという。

石井（2007）は、国際退職移住に関して、「退職高齢者を受け入れたい国」対「退職高齢者を受け入れたくない国」、及び「退職高齢者が住みたい国」対「退職高齢者が住みたくない国」という二つの対立項を想定している。日本人高齢者が「住みたい国」として選ぶ渡航先には、米国(特にハワイ州)、カナダ、ニュージーランド等が挙げられるが、これらは「退職高齢者を受け入れたくない国」であり、退職者のための長期滞在許可制度を設けていない。オーストラリアは、以前は「退職高齢者を受け入れたい国」であったが、現在では「受け入れたくない国」に方向転換しており、申請条件を厳しく引き上げた。具体的には、オーストラリアで退職者ビザを申請するには、1億円近い手持ち金が求めれることが、多くの移住希望者にとって大きな壁となっている。

一方で、マレーシア、フィリピン、タイなどの東南アジア諸国は「退職高齢者を受け入れたい国」であり、あの手この手で日本人高齢者を呼び込もうと獲得競争を展開している。日本人高齢者に期待するものは主に経済的効果で、小野（2010）は、国際退職移住は経済活動を行わない「非労働力の移動」であるだけではなく、医療や看護の面で「労働力を必要とする人々の移動」であることを強調している。また、高齢者が求める、自然や健康、生活の質を重視するライフスタイルの実現をめざす海外滞在が、新たな消費活動の一つと捉えられているという。そのため、例えば、タイでは、タイ観光庁と民間会社が協力して、何種類もの定年退職者向けパッケージサー

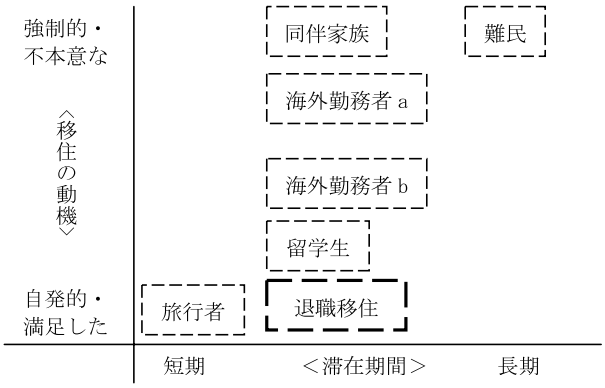



図１　滞在期間と動機による移住の型

ビスを提供している（原田2007）。フィリピン政府はフィリピン全土に「退職者村」を作る計画で、特に医療面での設備投資と対応体制の整備に全力を注いでいる（今2008）。

東南アジア各国の努力の甲斐は、日本人ロングステイ希望国上位10か国の一覧表にはっきりと見てとれる。かつては滞在希望先に、オーストラリアや欧米地域を選ぶ人が多かったが、ここ最近は「安・近・暖」を理由に、東南アジア諸国が名を連ねるようになってきた。

以下の表１は、日本人ロングステイ希望国の上位10か国を示している。ロングステイ財団はロングステイの定義を「生活の源泉を日本に起きながら海外の一ヶ所に比較的長く滞在し、その国の文化や生活に触れ、現地社会への貢献を通じて国際親善に寄与する海外余暇を総称したもの」としている。厳密には、ロングステイと国際退職移住は別物であるが、ロングステイの延長線上に国際退職移住があり、それらは相互に影響し合っていると考えられる。

下記の統計によると、2000年には滞在希望国の第一位はオーストラリアであった。長友（2007）は、90年代のオーストラリアへの日本人移住の現象について、「ライフスタイル価値観」の要素が大きいことを指摘している。つまり、仕事と余暇のバランスをとり、より理想的な生活を求めて、日本を離れる人々が目立っていたという。

マレーシアは長期滞在先として徐々にその存在感を増大させ、2000年には第10位だったのが、2006年からは、オーストラリアやヨーロッパ、他の東南アジア諸国などを引き離し、長年にわたって一位の座を獲得し続けている。マレーシアの英字新聞 THE STAR 紙は2010年12月２日付の記事で、駐マレーシア特命全権大使堀江正彦氏による、マレーシアは今後も、日本人にとっての老

表１　日本人ロングステイ希望国の推移（上位10か国）

| | 2000年 | | 2005年度 | | 2006年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 順位 | 希望国 | % | 希望国 | % | 希望国 | % |
| 1 | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | 15.0 | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | 16.3 | ﾏﾚｰｼｱ | 14.9 |
| 2 | ﾊﾜｲ | 10.1 | ﾏﾚｰｼｱ | 14.6 | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | 14.0 |
| 3 | ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ | 10.0 | ﾊﾜｲ | 11.8 | ﾀｲ | 11.2 |
| 4 | ｶﾅﾀﾞ | 8.7 | ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ | 11.4 | ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ | 10.5 |
| 5 | ｽﾍﾟｲﾝ | 8.2 | ﾀｲ | 11.0 | ﾊﾜｲ | 9.9 |
| 6 | ｲｷﾞﾘｽ | 5.7 | ｶﾅﾀﾞ | 10.6 | ｶﾅﾀﾞ | 8.5 |
| 7 | ｽｲｽ | 3.9 | ｽﾍﾟｲﾝ | 5.4 | ｽﾍﾟｲﾝ | 4.0 |
| 8 | ｲﾀﾘｱ | 3.9 | ｲｷﾞﾘｽ | 3.3 | ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | 3.2 |
| 9 | ｱﾒﾘｶ | 3.3 | ｱﾒﾘｶ | 3.2 | ｲｷﾞﾘｽ | 3.0 |
| 10 | ﾏﾚｰｼｱ | 3.0 | ﾌﾗﾝｽ／ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | 2.6 | ｱﾒﾘｶ | 2.0 |

| | 2007年度 | | 2008年度 | | 2009年度 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 順位 | 希望国 | % | 希望国 | % | 希望国 | % |
| 1 | ﾏﾚｰｼｱ | 19.3 | ﾏﾚｰｼｱ | 18.3 | ﾏﾚｰｼｱ | 16.6 |
| 2 | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | 11.8 | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | 11.6 | ﾊﾜｲ | 10.0 |
| 3 | ﾀｲ | 11.2 | ﾊﾜｲ | 10.4 | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | 9.4 |
| 4 | ﾊﾜｲ | 10.2 | ﾀｲ | 10.0 | ﾀｲ | 8.7 |
| 5 | ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ | 9.5 | ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ | 8.7 | ﾆｭｰｼﾞｰﾗﾝﾄﾞ | 7.5 |
| 6 | ｶﾅﾀﾞ | 8.5 | ｶﾅﾀﾞ | 8.3 | ｶﾅﾀﾞ | 6.7 |
| 7 | ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | 5.3 | ｽﾍﾟｲﾝ | 4.2 | ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | 5.9 |
| 8 | ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | 3.6 | ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | 3.7 | ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | 3.3 |
| 9 | ｽﾍﾟｲﾝ | 3.1 | ﾌｨﾘﾋﾟﾝ | 3.7 | ｽﾍﾟｲﾝ | 3.2 |
| 10 | ｱﾒﾘｶ | 2.9 | ｱﾒﾘｶ | 3.6 | ｱﾒﾘｶ | 2.9 |

出所）『ロングステイ調査統計2010』（財団法人ロングステイ財団）

後の海外滞在先として、最も注目される国であり続けるであろうという発言を大きく報じている。

このように、マレーシアが世界の中で圧倒的な人気を集めている理由として、稗田他（2012）では、「物価が安い」、「気候が快適」、「治安がいい」の三大理由を挙げている。上述の理由が、安定した日常生活の基盤を確たるものにしている。また、Ono（2008）が指摘しているように、マレーシアは物価が安くて生活しやすく、そこから生まれる余裕が、趣味やレジャーやボランティア活動を楽しむといった「生きがい」に結びつくという相乗効果を生み出していると考えられる。

上述の三大理由のほか、マレーシアでは「英語が通じる」という点も見逃せない。マレーシアの国語はマレーシア語であるが、英語も第二言語として広く浸透しており、国民の多くは英語が流暢である。長友（2007）がオーストラリアにおける日本人移住者を調査した結果、オーストラリア選択の二番目の理由として、英語が話されている国に滞在したいという希望が顕著に見られた。英会話を楽しみたいという人々にとって、言語の使用そのものが海外移住の動機の一つとなっている。また、Ono（2008）は、ハワイやオーストラリア、マレーシアを繰り返し訪問している夫婦について考察している。英語圏を何度も訪れてはいるものの、英語力に自信が持てない夫婦は、オーストラリア滞在中は劣等感や疎外感にさいなまされていたが、マレーシアに滞在中は、現地の人と英語で話すのもそれほど億劫ではなく、より積極的に会話が楽しめたという。言語の面からも、欧米諸国よりも東南アジア諸国のほうが、日本人セカンドホーマーがより快適に、安心して過ごせる可能性を示唆している。

以上をまとめると、「物価」と「気候」の二つの要因が、日本人中高年者を「海外」、特に「東南アジア」へと飛び出させる引き金となっている。そして、「治安」と「言語」がマレーシアの付加価値を高め、東南アジア地域の中からマレーシアが選択される理由となっている。さまざまな要素を総合的に検討した結果、最終的に下された決断が「マレーシア」なのである。

## ３．ＭＭ２Ｈプログラムと日本人セカンドホーマー

ＭＭ２Ｈプログラムとは、マレーシア政府が一定の基準を満たす外国人に対して10年間の滞在が可能なビザを発給しているプログラムのことである。マレーシア政府はとりわけ外国人定年退職者の移住招致に積極的で、1996年にシルバーヘアプログラムを導入し、長期滞在を奨励した。これが2002年にはマレーシアマイセカンドホームプログラム（通称ＭＭ２Ｈ）と改名され、今日に至っている。ＭＭ２Ｈの主な目的は観光収入の増益及び外国人投資と外貨取得による経済の活性化であるとしている（Ono2008）。観光収入は非常に重要な位置を占めており、ＭＭ２Ｈ戦略がある特定層を呼び集めるのに一定の効果を上げている（Shahrbanoo2010）。

ＭＭ２Ｈプログラムの参加資格は、人種、宗教、性別、年齢に関係なく、マレーシア政府が認めている全ての国の国民に与えられている。一方、経済的条件として、50歳未満の申請者は50万リンギット（約1400万円）以上の流動資産及び月1万リンギット（約30万円）以上の国外での収入があること、50歳以上の申請者は35万リンギット（約1000万円）以上の流動資産及び月１万リンギット（約30万円）以上の国外での収入があることが求められる。マレーシア政府は他の東南アジア地域より経済的な制約をより大きく設定しているが、それにより、千葉（2006）が指摘しているような、年金だけでは日本国内での生活がままならない、いわゆる「年金難民」と呼ばれる人々が流入するのを阻止し、比較的裕福な中間層を呼び込むことに成功している（稗田他2012）。

以上の条件を満たしてビザを発給された参加者には、より快適にマレーシア生活が送れるよう

にと、さまざまな「特典」が与えられている。特に、「日本から受け取る年金の税務免除」や「車を購入／輸入する際の非課税」は、日本人セカンドホーマーにとって恩恵が大きい。一方で、「不動産の購入」や「外国人メイドの雇用」、「子女の私立学校や大学への登録」や「パートタイム就労」の特典を活用している者は１割にも達していない（稗田他2012）。

今日までMM２Hは、日本人を含め、多くの外国人を魅了してきた。以下の表２は2006年から2012年におけるMM２H参加者数上位10か国を示している。

Siti Hamin他（2010）は、マレーシアにおけるセカンドホーマーの多くは比較的裕福な中高年の外国人であるが、その特徴には大きく二つのパターンがあると指摘している。一つ目のパターンは先進国の中流階級層であり、物価の安いマレーシアに住むことによって、年金生活をより安定した、豊かなものにしようとしている。もう一つは、途上国出身の富裕層が比較的生活水準の高いマレーシアに移り住むことによって、教育や健康管理などの面でより充実したサービスを享受しているという。

日本人セカンドホーマーは年々増え続け、とりわけ、2011年からは世界第一位の参加者数を記録しており、現地社会においても、日本人セカンドホーマーの存在は極めて大きいものとなっている。マレーシアの英字新聞 THE STAR 紙は2012年６月15日付の記事で、日本人セカンドホーマーの増加に着目し、一面で大きく報道している。

なお、稗田他（2012）では、MM２Hにおける日本人セカンドホーマーに、一種の特徴が見られることを指摘している。年齢を見ると、参加者のほとんどが60歳以上の、いわゆる定年退職者である。そして、アンケート回答者の約9割が夫婦同伴であった。MM２Hプログラムは決して定年退職者だけをその参加対象者にしているわけではないのだが、日本人参加者の場合、ほぼ全てのケースが退職後の海外移住に当てはまっている。日本人セカンドホーマーの典型としては、大卒で元会社員の夫と、高卒で専業主婦の妻の二人が、仕事や子育てを終え、大好きな海外旅行の延長線上を謳歌している。アンケート回答者の半数以上が、観光や海外駐在を含め、海外渡航経験は10回以上と回答しており、豊富な海外渡航経験を有していることがわかる。つまり、ある程度の経済的な余裕と、好奇心旺盛で行動的な性格がビザの取得を後押ししていると考えられる。

表２　MM２H参加者数上位10か国

| | 2006 | 2007 | 2008 | 2009 | 2010 | 2011 | 2012<br>(3月時点) |
|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 1 | ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｯｼｭ | ｲｷﾞﾘｽ | ｲﾗﾝ | ｲﾗﾝ | ｲﾗﾝ | 日本 | 日本 |
| 2 | 中国 | 日本 | 日本 | 日本 | 日本 | 中国 | 中国 |
| 3 | ｲｷﾞﾘｽ | 韓国 | ｲｷﾞﾘｽ | ｲｷﾞﾘｽ | 中国 | ｲﾗﾝ | ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｯｼｭ |
| 4 | 日本 | ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｯｼｭ | 中国 | 中国 | ｲｷﾞﾘｽ | ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｯｼｭ | ｲﾗﾝ |
| 5 | ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ | 中国 | 韓国 | ﾊﾟｷｽﾀﾝ | ﾊﾟｷｽﾀﾝ | ｲｷﾞﾘｽ | ｲｷﾞﾘｽ |
| 6 | ｱﾒﾘｶ | ｽﾘﾗﾝｶ | ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｯｼｭ | ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｯｼｭ | ﾊﾞﾝｸﾞﾗﾃﾞｯｼｭ | ﾊﾟｷｽﾀﾝ | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ |
| 7 | 韓国 | ｲﾗﾝ | ﾊﾟｷｽﾀﾝ | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ | ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ | ﾊﾟｷｽﾀﾝ |
| 8 | ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ | ｽﾘﾗﾝｶ | ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | 韓国 |
| 9 | 台湾 | ｱﾒﾘｶ | ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ | 韓国 | ｲﾝﾄﾞ | 台湾 | 台湾 |
| 10 | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | ｵｰｽﾄﾗﾘｱ | ｱﾒﾘｶ | ｲﾝﾄﾞﾈｼｱ | 韓国 | 韓国 | ｼﾝｶﾞﾎﾟｰﾙ |

出所）マレーシア政府観光省公式ホームページ「MM２H統計」http://www.mm2h.gov.my/statistic.php

逆を言えば、経済的に困難であったり、夫婦どちらかに健康上の問題があったり、扶養が必要な家族が日本に残っていたりすると、MM２Hのビザの取得がぐっと困難になる。これらの条件をクリアした一種の特別層だけがこのプログラムの恩恵を享受できているのが現状である。

## ４．調査の対象と方法

MM２Hプログラムにおける日本人セカンドホーマーの現状を把握するため、2009年４月から2010年１月にかけて、量的及び質的調査を実施した。調査対象者はいずれもMM２Hのビザを既に取得して、調査時点においてマレーシアに滞在している日本人セカンドホーマーである。

量的調査にあたっては、アンケート用紙を配布し、回答用紙を同封の返信用封筒に入れ返送してもらう方式を採用した。アンケート用紙の配布は、日本人セカンドホーマーが集中しているクアラルンプール、ペナン及びキャメロンハイランド地域を中心に、日本人会、セカンドホームクラブ、ビザ申請代行業者、キャメロン会などの協力を得て行った。

質的調査に関しては、全部で５名のセカンドホーマーに筆者の所属大学に集まってもらい、座談会形式で話し合いの場を設けた。座談会では自己紹介から始まり、「社会生活・言語・安全管理・不動産・医療・子弟教育」の６つのテーマに沿って、それぞれの具体的な経験談や意見の聴き取りを行った。

そのほか、考察に際して重要と考える２名への個別インタビューも行った。一人目はセカンドホームクラブ会長の阪本恭彦氏である。阪本氏は『ご褒美人生マレーシア』（2006）及び『マレーシアに定住でご褒美人生』（2010）の著書の出版をはじめ、各種勉強会や交流会を主催しており、マレーシアにおける日本人セカンドホーマーの先駆者且つ中心的存在である。二人目はトロピカルリゾートライフスタイル社社長の石原彰太郎氏である。石原氏はおよそ10年にわたって、数多くのMM２H参加（希望）者と接し、スタディーツアーの実施やビザ申請の代行、ビザ取得後の日常生活の問題解決など、幅広くセカンドホーマーをサポートしてきた経験を有する。

本稿では、アンケート回答者100名（男性55名、女性45名）の集計結果に基づいて、日本人セカンドホーマーの全体像を測ることにする。また、前述の５名の座談会参加者（男性３名、女性２名）をＲ１～Ｒ５とし、具体例として取り上げる。更に、阪本氏及び石原氏の個別インタビューから得られた情報も随時取り扱う。

## ５．日本人セカンドホーマーの生活状況と異文化接触

本欄では、アンケート調査及びインタビュー調査を通して得られた回答の分析結果に基づいて、マレーシアにおける日本人セカンドホーマーの異文化接触の実態を検証する。

### (1) 生活状況

マレーシアでの住居に関しては、実際に物件を購入した人は10％で、大半の回答者は賃貸住宅に入居している。コンドミニアム（マンション）やアパートに住んでいる人が全体の91％にのぼり、一戸建てに住んでいる人は非常に少ない。Ｒ３とＲ５は、コンドミニアムのほうが24時間のセキュリティー体制が整っているなど、治安の面でより安心でき、また、プールやサウナなどの設備が整っているので、非常に便利だという。住居地周辺の主な民族構成について尋ねたところ、中国系マレーシア人が25％、マレー系マレーシア人が15％、日本人以外の外国人（例えばイラン

人など）が12%、日本人が７%であった。この設問に関しては、最も多かったのが無回答で、38%にものぼった。隣近所の住民との面識があまりないのであろうか、やや気にかかるところである。

主な情報収集源について尋ねたところ、衛星放送で見られる日本のテレビ番組と回答した人が86%と一番多かった。一方、現地のテレビ番組から情報を得ている人は９%と少ない。テレビに次いで、インターネットも88%と多かった。日本の新聞を情報源としている人が18%と少なかったのは、マレーシアで売られている日本の新聞（読売新聞、朝日新聞、日本経済新聞）の価格が日本の約3倍と割高であることから、年金生活者には手が届きにくいためと思われる。

上記の情報収集源に関連して、MM２Hプログラムを知ったきっかけについてであるが、最も多いのが「家族／知人の紹介」と「書籍」で、それぞれ27%である。「書籍」は、前述の、阪本氏による『ご褒美人生マレーシア』（2006）を指していると思われる。次いで、「インターネット」が11%、「新聞」が11%、「マレーシア政府観光省のパンフレット」が６%となっている。いわゆる「口コミ」が優勢である。

日常の買い物に関しては、日系のデパートやスーパーを利用している者が77%と最も多かった。マレーシアでの買い物は、価格に関しては高い満足感が得られているが、品質、品揃え、サービス、衛生面に関してはいずれも満足度が低かった。マレーシアでの食事全般に関しても同様で、価格の面では高い満足感を得ているものの、味、栄養、サービス、衛生の面では十分な満足感は得られていない。以上より、日本人セカンドホーマーは、マレーシア滞在中も、日常的に日本料理を食べたり、日本の製品を使ったりしていることが容易に想像できる。

次に、医療に関してであるが、アンケート回答者の17%は今までに医療機関にかかったことがないと言っている。私立病院へ行ったことがある人は63%であるのに対し、国立病院へ行ったことがある人は８%である。医療機関を選択する際に主に考慮する項目として、「日本語の使用」が69%と最も多く、次いで「専門技術」が50%、「医師の経験」が40%となっている。マレーシアには日本の医学部を卒業した日本語可能な医師や、日本人看護婦が勤務している病院がいくつかあり、それらが日本人セカンドホーマーの間では常識のようになっている。また、できれば日本人医師に直接診察して欲しいと思っている人は56%と半数を超えている。実際に、セカンドホームクラブの長年の尽力もあって、日本人医師が勤務している病院（HSC ジャパンクリニック）が既にクアラルンプールに開所している。医療保険の加入については、日本の国民健康保険を除き、日本の保険会社の保険に加入している者が50%、無加入が35%、現地の保険会社が９%であった。

また、日本への一時帰国の頻度について尋ねたところ、１年に２回以上帰る人が最も多く、52%と半数を超えていた。次いで、１年に１回が34%、数年に１回が９%となっており、多くの回答者が日本へ頻繁に一時帰国している状況が明らかとなった。

プログラム参加における全体的な満足度に関しては、「とても満足している」が43%で最も多く、次いで「少し満足している」が33%、「普通」が18%、「あまり満足していない」が４%、「全然満足していない」は０%である。経済的条件をクリアし、いくつもの複雑な手続きを経て、苦労の末にようやく手にした現状を大半が肯定的に捉えている。

以上より、日本人セカンドホーマーは、マレーシアにいる間も、日本から得られる情報や製品を頼りに生活を送っていることがわかる。また、消費活動も日系の店が中心で、医療機関に関しては特に日本語の使用の有無が選択の決め手となっている。このように、異国にいながらにして、日本の自文化を維持し続けているのが現状ではあるが、多くの回答者がMM２Hプログラム参加

に高い満足感を示している。

(2) 対人コミュニケーション

ほとんどの日本人セカンドホーマーが夫婦二人でマレーシアに滞在していることから、日常的に交わされる家庭内での夫婦間の会話が対人コミュニケーションの中心になっていると考えられる。

日本にいる親類や知人への連絡に関しては、１か月に数回する者が62％、１週間に数回が28％となっており、ほとんどの回答者が密に連絡をとっていることがわかる。連絡の手段として電子メールを用いる人は84％、国際電話は61％であった。中高年者といえども、日本人セカンドホーマーのコンピューターリテラシーの高さが伺える。

また、マレーシア国内における日本人同士の交流について尋ねたところ、「ほぼ毎日」が19％、「週に３～４回」が33％、「週に１～２回」が39％、「ほとんどない」が９％であった。約９割が日本人同士の交流を強く維持している。回答者の傾向は、滞在期間が長くなるほど現地との交流に傾倒するわけでもないことを示している。阪本氏の言うように、日本人社会に溶け込めるかどうかも、マレーシア滞在の継続を決定付ける要因の一つと考えられる。

具体的な交流内容として、例えば、Ｒ１は、マレーシアに避暑や避寒に来る日本人の世話をしている。短期滞在用の住居の情報提供やゴルフの手配が主な仕事である。多いときには１日に50通のメールが来るほど、問い合わせが後を絶たなくて、忙しい毎日を送っているが、皆に頼りにされ、やりがいを感じている。Ｒ３は、夫婦で日本人会のクラブに参加している。Ｒ３の奥さんはほぼ毎日日本人会へ行っており、一日を日本人会で過ごすことが多いという。Ｒ５は、日本人学校に通っている子どもや国際結婚した親を持つ子どもたちを中心に、日本の伝統遊びを教えるボランティア活動をしている。

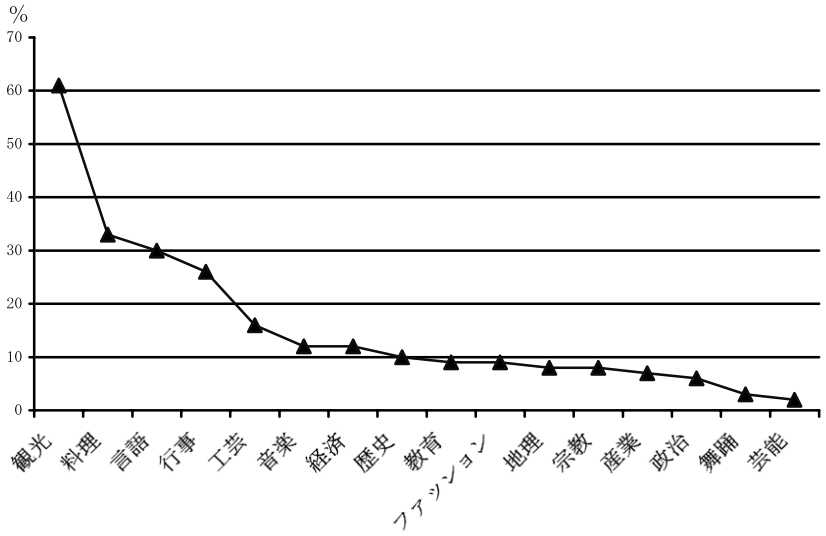
一方、現地人の友人の有無について尋ねたところ、「多い」が24％、「少ない」が56％、「全くいない」が20％であった。現地人との交流の目的に関しては、食事が38％、情報交換が37％、趣味が29％、おしゃべりが28％となっている。主な交流場所は、自宅が37％、ゴルフ場が26％、習い事教室が19％となっている。

また、外国語の運用能力に関しては、ほとんどの回答者が、義務教育や語学教室などで英語を勉強した経験を有するものの、７割以上が初級だと自己判定している。マレーシア語ができる者は極めて少なく、マレーシア語で自己紹介ができる人は２割を切っている。そして、今後、英語を学ぶ必要性を感じている人は76％、マレーシア語を学ぶ必要性を感じている人も50％となっている。

以上、対人コミュニケーションの面からまとめると、日本人セカンドホーマーは、マレーシアに滞在中も、日本にいる親族や友人と頻繁に連絡を取りながら、また、マレーシアで出会った日本人同士の交流を大切にしながら生活していることがわかる。一方、現地の友人が多いと実感している人は2割弱で、現地の人との交流が全くないわけではないが、接触の場面が非常に限定的であると言える。

(3) 異文化に対する態度

以下のグラフ１は、日本人セカンドホーマーが、マレーシアに関して興味を抱いている項目を




グラフ１　マレーシアに関して興味のある項目

示している。なお、この設問は複数回答可としてある。

最も顕著なのが「観光」で、約60％と、半数以上を占めている。２番目は「料理」、3番目は「言語」、４番目は「行事」で、それぞれ約3割ほどが興味を示している。それら以外の項目は約１割程度と振るわない。マレーシア滞在中の楽しみを、観光、レジャー、グルメ等に見出している、日本人セカンドホーマーの姿が伺える。

稗田他（2012：43）のデータにおいて、マレーシア選択の理由として最も少なかったのが「文化に興味がある」で、回答者が1割にも満たなかったことも、日本人セカンドホーマーのマレーシア文化に対する態度を象徴している。

日本人セカンドホーマーの関心事は、表３が示すように、マレーシア政府観光省（2010）が多民族多文化を売りに出しているのとは極めて対照的である。日本人セカンドホーマーの間では、マレーシアを取り巻く経済的、気候的条件だけが注目され、人的要因には無関心の傾向が否めない。人的交流の促進は今後の課題の一つであろう。

表３　マレーシアの魅力（マレーシア政府観光省）

| マレーシアの魅力 |
|---|
| 1）国民が親日的であり、また国民性も穏やかで治安もよい所 |
| 2）ビーチや高原、熱帯雨林など都市によってさまざまな滞在スタイルがある |
| 3）マレーシアはマレー系、中国系、インド系と先住民族が住む多民族国家で、1つの都市に滞在していても様々な文化や料理が楽しめる |
| 4）多民族国家の為英語が広く使用されており、言葉の心配が無い。また主要都市では道路や病院、宿泊施設も充実している |
| 5）生活水準は日本と大差が無いのに、物価は日本の約3分の1である |

出所）マレーシア政府観光省マイセカンドホームプログラムホームページ
http://www.tourismmalaysia.or.jp/long/long_b.htm　より筆者要約して作成

また、MM２Hのビザを取得する前に、下見／体験ツアーに参加したかどうかを聞いたところ、「経験なし」が43％と最も多く、次いで「１回のみ」が35％であった。事前学習については、62％が事前学習をしたと答えたが、そのほとんどは自学自習であった。事前学習しなかった人は、「適切な情報源がなかった」（11％）、「時間がなかった」（８％）、「特に必要ないと思った」（８％）とその理由を述べている。

異文化に関連して、実際に困難に直面した事柄を聞いたところ、最も多かった回答が「特になし」の37％で、次いで「行政手続」が34％であった。「習慣」は28％、「マナー／礼儀」が22％、「宗教」が12％といずれもあまり多くなかった。石原氏の話によると、日本人セカンドホーマーからの問い合わせの多くは、インターネットの接続が悪いとか、家屋に不具合があるなど、いわばハード面での問題で、異文化接触によって生ずる、ソフト面に関する問題についての相談はないという。

## ６．考察

以上のアンケートの分析結果からわかることは、多くの日本人セカンドホーマーは海外に生活の拠点を置きつつも、依然として日本志向が強く、佐々木（2005）が「異文化の中のモノカルチュラリズム」と呼んでいるような状況にある。つまり、日本人セカンドホーマーは、マレーシアの中に小さな日本人社会を形成しており、その枠の中に留まっている。

回答者のほとんどは、日本のテレビ番組を主な情報源とし、日本料理を食べ、日系の店で買い物し、日本語が通じる病院へ行く。そして、頻繁に日本に一時帰国し、日本にいる親類や友人との連絡を欠かさず、マレーシア滞在中のほかの日本人との交流を大切にしている。

一方、現地の文化への関心は低く、現地の人との交流も多いとは言えない。海外にいながらも、異文化接触が非常に限定的である。

日本人セカンドホーマーがマレーシアで長期滞在が可能なのは、彼らが高い外国語能力や異文化間能力を有しているからではなく、外国語を使わなくても、あるいは現地の人と交わらなくても生活していける環境が整っているからである。

かつて、経済的困窮にあえぎ、労働移民として、ブラジルへの移住を余儀なくされた日本人は、ブラジルへ向かう船の上で、ポルトガル語をはじめ、カトリック教、西洋料理、洋裁などを、皆必死で勉強していた（眞崎2003）。一方、マレーシアの日本人セカンドホーマーが、どの程度、現地の人と交わり、外国語を身につけるのかは、全て個人の自由に委ねられている。

河原（2010）はタイのチェンマイ地域における日本人ロングステイヤーで構成されるＡ会（仮称）と現地社会との交渉・交流の現状分析を行い、日本人ロングステイヤーはタイ語、英語共に会話能力が低く、個では十分に独立できていないと結論付けている。多くのロングステイヤーが言語的問題を抱えながらも、海外での長期滞在が可能になっているわけとして、語学が堪能なごく一部の者が媒介者となって、現地社会との交渉に当たっていること、日本的な生活、日本語による生活が可能な環境が整っていることを挙げている。また、日本人ロングステイヤーはビジネスの重要な顧客だと捉えられ、時間的余裕から交流行事への参加も期待されるなど、歓迎傾向にあるという実態について述べている。マレーシアにおける日本人セカンドホーマーもこれとよく似た状況にあると言える。

また、日本人セカンドホーマーは海外に生活の拠点を置くことによって、多数派から少数派へ

の属性移行を余儀なくされるものの、文化的に同質的なものが集まることによって、自己のアイデンティティを揺るぎないものとして保持している。日本人セカンドホーマーが新しい地に足を踏み入れて、新たな出会いに期待しているのは、新しい現地の友人を得ることではなく、日本全国から集まる人たちの中から、新しい日本人の友人を見つけることのほうが大きいように思われる。実際に、日本人セカンドホーマーの特徴で見られたように、プログラム参加者は一種のふるいをかけられて残った特定層であり、年齢、社会的背景、経済力、趣味などの面で似ていることが多い。阪本氏著の『マレーシアに定住でご褒美人生』（2010）の中に、一人の男性セカンドホーマーによる「日本にいたら、決して出会う事はなかったであろう沢山の人に出会え、おまけに価値観も同じ輪の中で、同じ方向を見て暮らしていけるのですから楽しい」という記述がある。気の合う仲間といっしょにいられるという安心感や充足感が、彼らのマレーシア滞在に対する満足感を高めていると考えられる。

一般的に、生まれ育った文化から離れて異文化圏に移り住んだ場合、異文化接触に関するさまざまな問題が起こると予測されるが、日本人セカンドホーマーは、さほど深刻なカルチャーショックや文化衝突に陥っていない。それは、決して高い異文化間能力を身につけているからではなく、異文化との関わりは表面的かつ限定的で、あらかじめ摩擦や衝突を避けた、自己防衛的な接触を保っているからである。磯谷（1998）によると、アドラーの異文化適応プロセスでは、「異文化との接触」、「自己崩壊」、「自己再統合」、「自立」、「独立」の５段階をたどるとされているが、日本人セカンドホーマーの場合、初段階の「異文化との接触」を、意識的あるいは無意識的に事前に回避しているため、その後に続く段階を踏んでいない状況にあると考えられる。

また、異文化理解に関しても、マレーシアの伝統文化や社会事情に関する関心は決して高くはない。主な関心事は観光で、レジャーやグルメを楽しむ観光旅行の延長線上にマレーシアを位置付けている。Ting-Toomey, S.（1999）による文化のアイスバーグ（図２）に例えるならば、日本人セカンドホーマーは衣食住や流行など、水面上の、目で見える側面に関してはよく知っているが、現地の人が持つ価値観や信念、規範や伝統など、水面下にある、目に見えない側面については深い理解を示す段階には至っていないと考えられる。

日本人セカンドホーマーは概して、海外渡航経験が多く、海外滞在期間も長いが、高い異文化理解能力や異文化間コミュニケーション能力を身につけているわけではない。異文化間能力は自然に身につくものではなく、異文化を背景に持つ人との深い交流を通して、時には摩擦や衝突を

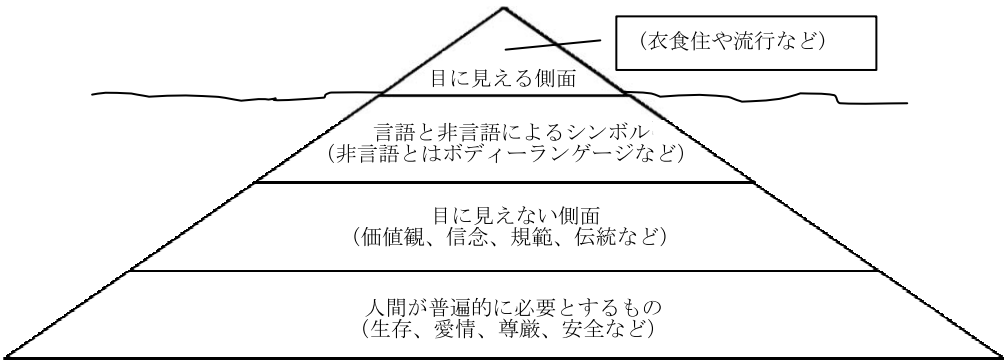



図２　文化のアイスバーグ（Ting-Toomey, S.1999）

乗り越えて、徐々に高めていくものだと思われる。

ところで、異文化の中にあっても自文化の枠に留まる傾向は、日本人セカンドホーマーだけに見られるものではない。例えば、海外にある日本人学校は、現地に開かれた学校というイメージが希薄で、異文化理解教育や異文化間教育に遅れているという現実があった（佐々木2005）。また、日本国内においても、身近に留学生がいるにも関わらず、留学生との交流がある日本人学生はごく一部に限られている（川那部2006）など、異文化交流の機会が目の前にあっても、その機会を活用していない日本人、あるいは日本社会の態度が鮮明である。結果として、在日外国人は、日本社会の根深い閉鎖性、いわゆる「見えない壁」の存在を実感し、日本社会から遠ざかっていってしまう傾向がある（萩原1991）。川那部（2006）は、日本人が異文化交流に対して消極的な理由を、「根深い所では、あるいは集団主義、閉鎖性、差別意識など、日本人特有のムラ意識的なものが関係しているのかもしれない」と考察している。

異なるものを無理に混ぜ合わせる必要はないという考え方もあるかもしれないが、大西（2001）は、異文化間接触の結果として、受入文化への肯定的客観的態度の形成、自文化の見直し、広い世界観の獲得、ステレオタイプや自文化中心主義の低減、自己知覚の拡大など、肯定的な効果が得られるとして、異文化接触を高く評価している。また、神谷・中川（2007）は、異文化接触による相互の意識変容に関して述べている。それによると、異文化接触を通して形成された対人関係は、新たな自己成長をもたらすものであり、一度形成された信頼関係は、次のより高次の活動へとつなげていく活動の連鎖を可能にし、双方向に良い効果があるという。そのため、異文化理解教育は、義務教育の中でも重要な役割を果たすようになってきており、異文化及び自文化に関する知識面の教授のみならず、文化的背景の異なる人との交流を円滑に運ぶためのスキルを身につけるための実践が行われてきている（川那部2006）。

では、日本人セカンドホーマーの異文化接触を促進していくには何が必要なのであろうか。加賀美（2001）は、異文化間交流を阻む４つの壁についてまとめているが、それらは日本人セカンドホーマーの前にも立ちはだかっていると考えられる。第一は、情報の壁など物理的な壁である。どこにどんな人がいるのか、という基本的な情報が提供されることが少ないため、そもそも交流のきっかけがつかめないという実情がある。第二に、スキルの壁がある。多くの日本人セカンドホーマーは、英語、マレーシア語共に、初級程度の言語運用能力しか持っていない。単に語彙や文法といった言語的知識のみならず、どのように接したらよいのか、どんなトピックで話したらよいのかなど、異文化間コミュニケーション能力全体を高めていく必要がある。第三に、心理的な壁が挙げられる。無関心、不安、遠慮など、知らない相手との接触を拒む心理的要因を取り除く必要がある。そして、第四は文化的な壁である。宗教に伴う価値観の違いや、それに伴う食べ物の習慣の違いなどは、日本人とマレーシア人の交流を困難にする恐れがある。異文化間交流をさかんにしていくには、これらの壁を一つずつ打開していかなければならない。

しかしながら、目の前に立ちはだかる高い壁を個人の力で乗り越え、新たな道を開拓するのは至難の業である。壁を乗り越える一つの方法としては、日本人会に加わるなどして、日本人仲間と動くことが考えられる。例えば、グループでボランティア活動に参加したり、現地との文化交流活動に参加することを通して、少しずつ壁を乗り越えていくことができると期待できる。

また、交流の促進という面から考えると、日本人セカンドホーマーの持つ日本語や日本文化を活用していくという方法もある。それは、例えば、日本語学習を必要としている現地の人たちに

対する日本語使用であったり、日本文化に興味を持つマレーシア人に対する文化交流であったりする。実際に、Ｒ２は日本に留学経験のあるマレーシア人の子どもたちと日常的に接しており、彼らの日本語が風化しないように、あえて日本語で話すのだという。また、Ｒ５も、マレーシア人と日本人の国際結婚で生まれた子どもたちに、日本の伝承遊びを教えつつ、自然な日本語の習得を促すように日本語で話しかけているのだという。このような例以外にも、マレーシアには日本への国費留学を控える予備教育課程に属する学生を筆頭に、日本語学習者が大勢いることから、これらの学生との交流の機会を設けることで、日本語や日本文化の伝達に大きく貢献できると期待できる。

そのほか、日本人セカンドホーマーが持っている優れた知識と経験を生かすために、人材資源という形でマレーシア社会に還元していくシステムの構築も考えられる。それにより、日本人セカンドホーマーは単なる観光消費者ではなく、まさに日本とマレーシアの架け橋としてかけがえのない存在になるだろう。現地への貢献によって得られる充足感が、彼らにとっての更なる「生きがい」にも直結していくに違いない。

このようにして、日本人セカンドホーマーが現地の人とのコミュニケーションの場を持ち、現地の文化を学び、また、現地社会に少しでも貢献していくことで、ＭＭ２Ｈプログラムは受入側及び参加者の双方にとって、より意義のあるものになると期待できる。

## ７．まとめと今後の課題

本稿では、ＭＭ２Ｈプログラムに参加している日本人セカンドホーマーの異文化接触に関する実態と課題を見てきた。退職後海外に移り住むことが日本人中高年の間で一つのトレンドになっている現代において、物価が安くて、気候が穏やかな点が、日本人中高年の足を海外へと向けており、更に比較的治安がよく、英語も通じることから、マレーシアという国が注目されるようになった。

日本人セカンドホーマーにはいくつかの共通点が見られる。象徴的なのは、多くの日本人セカンドホーマーが中流階級層に属し、夫婦でレジャーやグルメなどを楽しみながら、観光旅行とロングステイの延長線上を歩み続けていることである。ほとんどの者は海外経験が豊富ではあるが、高い外国語能力や異文化間能力を有しているわけではなく、彼らの異文化接触は非常に限定的である。日本人セカンドホーマーは、マレーシアという新しい土地で、気の合う日本人の仲間を見つけ、楽しい毎日を送っている。

しかし、これらの現状に満足することなく、受入国マレーシア人との交流の場を増やし、互いの文化と言語を学び合う機会がもっと増えれば、受入側と参加者側の双方にとってより有意義な時間が享受できると思われる。こうして得られた互いの信頼関係が基盤となって築き上げられた国と国との親密な関係が、国の将来を担う次世代へと受け継がれていくことも重要である。

今後の研究課題としては、第3の段階、つまり「帰国後」の状況について、元セカンドホーマーを対象に調査研究を進めることが考えられる。滞在中の様子をより客観的に振り返ってもらうことで、後に続く人にとって、そして、ＭＭ２Ｈプログラムの今後にとって、より有益な情報が得られると思われる。

最後に、日本人セカンドホーマーのプログラム全体に対する高い満足感は、ＭＭ２Ｈの将来が明るいこと物語っている。受入側と参加者側が互いに手を取り合い、高め合っていくことで、Ｍ

Ｍ２Ｈプログラムは今後も更なる成功を収めることができると思われる。

**謝辞**

本研究は2008年度「住友財団アジア諸国における日本関連研究助成」を受けて実施された。ここに記して、お礼申し上げる。また、アンケートに回答、または座談会に参加してくださったセカンドホーマーの方々、並びに個別インタビューに快く応じてくださった阪本恭彦氏及び石原彰太郎氏に心より感謝申し上げる。

**参考文献**

石井和平「日本人のIR M行動：退職者移住とロングステイ・ビジネスの勃興」『社会情報』第16号（2007年）、67－71頁。

磯谷友子「異文化との出会い：カルチャー・ショックと異文化適応」八代京子他編『異文化トレーニングボーダレス社会を生きる』（三修社、1998年）、241－283頁。

今防人「フィリピンにおける日本人ロングステイの可能性」『実践女子短期大学紀要』第29号（2008年）、203－217頁。

大西晶子「異文化間接触に関する心理学的研究についてのレビュー：文化的アイデンティティ研究を中心に」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第41号（2001年）、301－310頁。

小野真由美「私の研究：マレーシア・マイセカンドホーム」阪本恭彦・阪本洋子編『マレーシアに定住でご褒美人生』（カナリア書房、2010年）、84－85頁。

加賀美常美代「留学生と日本人のための異文化間交流の教育的介入の意義―大学内及び地域社会へ向けた異文化理解講座の企画と実践―」『三重大学留学生センター紀要』第３号（2001年）、41－53頁。

片桐新自・永井良和・山本雄二編『基礎社会学』（世界思想社、2010年）

神谷順子・中川かず子「異文化接触による相互の意識変容に関する研究―留学生・日本人学生の協働的活動がもたらす双方向的効果―」『北海学園大学学園論集』第134号（2007年）、１－16頁。

川那部和恵「異文化理解教育における実践的アプローチの可能性」『奈良教育大学教育学部附属教育実践総合センター紀要』第15号（2006年）、53－60頁。

河原雅子「タイ・チェンマイにおける日本人ロングステイヤーの適応戦略と現地社会の対応」『年報タイ研究』第10号（2010年）、35－55頁。

財団法人ロングステイ財団『ロングステイ調査統計2010』（財団法人ロングステイ財団、2010年）

阪本恭彦『ご褒美人生マレーシア』（イカロス出版、2006年）

阪本恭彦・阪本洋子『マレーシアに定住でご褒美人生』（カナリア書房、2010年）

佐々木泰子『異文化間教育とコミュニケーション教育』（アルク、2005年）

鈴木一代『異文化遭遇の心理学』（ブレーン出版、1997年）

千葉千枝子「ハッピーロングステイをするために」『羅針』第13号（2006年）、32－33頁。

長友淳「90年代日本社会における社会変動とオーストラリアへの日本人移民―ライフスタイル価値観の変化と移住のつながり―」『オーストラリア研究紀要』第33号（2007年）、177－200頁。

萩原滋「日本留学に対する在日および帰国留学生の評価―1975年および1985年の調査結果から―」

『異文化間教育』第５号（1991年）、35－48頁。
原田優也「タイのロングステイ観光の現状と課題」『産業総合研究』第15号（2007年）、119－135頁。
稗田奈津江・シティ ハミン スタパ・ノルマリス アムザ・ムサエブ ターライベク「マレーシアマイセカンドホームプログラムの妥当性：日本人セカンドホーマーの視座から」『地域イノベーション』第４号（2012年）、35－46頁。
眞崎睦子「ブラジル移民への栞：横浜・神戸・船上の移民教育」『大阪大学21世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」』（2003年）、110－123頁。
Ip, D., Wu, C. T./Inglis, C., "Settlement Experiences of Taiwanese Immigrants in Australia", *Asian Studies Review,* 22(1998), pp. 79–97.
King, R., Tony, W./Williams, A., *Sunset Lives?: British Retirement Migration to the Miditerranean* (Oxford and New York: Berg, 2000)
Kubo, T./Ishikawa, Y., "Searching for "Paradise": Japanese International Retirement Migration", *Japanese Journal of Human Geography,* 56(2004), pp. 74–87.
Ono, M., "Long-Stay Tourism and International Retirement Migration: Japanese Retires in Malaysia", *Transnational Migration in East Asia Senri Ethnological Reports,* 77(2008), pp. 151–162.
Sato, M., *Farewell to Nippon : Lifestyle Migrants in Australia* (Melbourne: Trans Pacific Press, 2001)
Shahrbanoo Gholipour Freydouni, "Malaysia Tourism Marketing Strategy in Encountering Global Economic Crisis", *IEEE,* (2010), pp. 360–363.
Siti Hamin Stapa, Normalis Amzah, Hieda, N./Musaev, T., "Investigating Social Issues among the Japanese Adapting Malaysia as a Second Home", *Proceedings of the Forth International Malaysia-Thailand Conference on Southeast Asian Studies,* (2010).
The Star, "Malaysia is Top Spot for Japanese" (2010/12/02)
The Star, "Yen for Second Home" (2012/6/15)
Ting-Toomey, S., *Communicating Across Cultures* (New York: The Guilford Press, 1999)

ウエブサイト

http://www.mm2h.gov.my/japanese/index.php （マレーシアマイセカンドホームプログラム―マレーシア政府観光省　アクセス日2012/08/30）
http://www.mm2h.gov.my/statistic.php （マレーシアマイセカンドホームプログラム統計―マレーシア政府観光省　アクセス日2010/06/17）
http://www.tourismmalaysia.or.jp/long/long_b.htm （ロングステイ in Malaysia―マレーシア政府観光省　アクセス日2010/12/02）
http://www.my.emb-japan.go.jp/Japanese/ryoji/census/2009.htm （マレーシア在留邦人数の調査結果について―在マレーシア日本国大使館　アクセス日2010/12/03）
http://www.longstay.or.jp/modules/longstay/index.php?content_id=8 （ロングステイの定義―財団法人ロングステイ財団　アクセス日2010/12/05）
http://aon.mediaroom.com/index.php?s=43&item=1987 （European Workers Want to Retire Abroad… and Ideally to the Sun―Aon ホームページ　アクセス日2010/12/07）